

● シリーズ 私の見た日本 Vol.175

## Urban Memories

Lefebvre Eric (ルフェーブル・エリック)

1982年フランス生まれ。フランス国立建築大学パリ・ラ・ヴィレット卒業後、留学生として2007年来日。「シエルトインターナショナル学生設計競技2013」優秀賞受賞。2012年～大阪産業大学 デザイン工学部 建築環境デザイン学科 非常勤講師  
現在の研究テーマは「日本の大都市近郊工業都市における職住近接型街区の形成プロセスの解明と将来予測」



私はフランスで生まれ育ちました。建築家の父の影響で、幼少時代からarchitectureに囲まれて育ちました。小学校時代までは自宅に父の事務所があったため、初めて建築雑誌を読んだのがいつだったかを思い出すことはできませんが、おそらく放課後やトイレに座っていたときです。当時、建築事務所にはTOTO出版の建築雑誌が大切に置かれ、人気のある参考文献でした。そのなかで初めて、安藤忠雄や坂茂などの有名な日本の建築家の作品を知りました。彼らは完全に新しい建築の発想を表現しており、安藤忠雄のコンクリートの美しさ、坂茂の素材の自由な使い方感激しました。

子どもの頃から父の仕事近くで見てきたこともあり、高校を卒業してからは自然と国立建築大学に入学しました。卒業と同時に建築士の免許をもらうまでの在学中の6年間、よく友人とSANAAやアトリエ・ワン、シーラカンスといった有名な日本の建築事務所について話題にしていました。そして、卒業の準備と平行して日本で実務経験を積む計画を立て

てていましたが、計画を進めていくなかで日本の文部科学省が設けている留学制度を利用することになり、実務家としてではなく、学者として日本に行くことを決めました。

こうして2007年9月に日本の大阪に来ました。来日してからの数カ月は、フランスとは全く異なる人々や空間に囲まれているという刺激的な環境で、大変楽しく豊かな毎日でした。しかし、月日が経過するにつれて建築やまちの使い方にフランスとの大きな違いを感じるようになりました。それは、明らかに海外にはない日本建築や日本ならではの空間の使い方といったものではなく、特に都市組織の作り方のペースの違いについてでした。フランスを出発する前に「スクラップ&ビルド」という概念を学びましたが、実際に現場を見て、日本のまちで生活するなかでやっとその概念と意味を鮮明に感じることができました。私は大阪というまちの南北をひたすら歩き、中之島のダイビル、御堂筋通り沿いの大丸百貨店、道頓堀のキリンプラザ、そして、難波の歌舞伎座を見ました(写真1)。しかし、

これらの建物は私が来日して数カ月、または数年でなくなりました。有名な建築物ばかりではなく、自宅から近く、日常のなかで毎日目にしている風景もどんどん変わっていききました(写真2)。

ヨーロッパではあちこちに古代の建築物が多く残っており、それらの多くは複雑な建築技法を用いたものではなく、地震の揺れに耐える必要がないため、壁の上から下までの簡単な加重の移動に堪えられるように考えられています。昔の技術は精密な計算によるものではなく、大量の素材の使用によって安全性を確保していました。地震が少ない環境であることに加え、大量の頑丈な素材を利用してシンプルにつくられたものであるため、古い建築物が当たり前のように残っています。また、日本では古い建物は経済的な価値をもたないのに対して、フランスでは建築物の年齢が不動産の価値に負担をかけることはありません。むしろ建物の購入は貯金や投資の対象と考えられ、「Investir dans les pierres (石に投資する)」という表現が使われています。

このように古い建物は古いほど価値をもち、数百年前からまちの景観が変わることはありません。建築遺産を守るためのさまざまな法律や条例も存在します。これらの条件のもと、昔の建築物の寿命はさらに伸びていくのです。

私のようなヨーロッパの建築家はその国において現代風の建築物を設計するということは、多くの場合、周囲の建築環境との戦いなのです。そのため、新たな建築物をつくりたいフランスの若手建築家にとって、日本は黄金の国に見えるのです。そこには高密度の人口とヨーロッパより短い寿命の建築物がなく、永遠に行われる都市の再構築が存在していて、自由に新しい建物を設計することができる魅力にあふれているからです。しかし、日本に来るまで私が憧れていたそのようなまちの再構築における建築の使われ方は、自分が大切であると感じていた建物までも飲み込んでいくように感じられるようになりました。

そのようななかで自分の住まいをつくるにあたり、古い家を探していたところ縁があっ

て、京都にある取り壊される予定の藤井康二の作品「汐見邸」を引き取らせてもらうお話をいただきました(写真3)。その過程で、フランスでは習わなかった1920～1930年代当時の日本近代建築にはアバンギャルドに富んだ作品があったことを知りました。当時の雑誌「新建築」を古書店で見ても、同時代のドイツのバウハウスの作品と通じるものが多くありました。それらは単なるコピーではなく、日本の建築材や環境にあったオリジナルな作品ばかりでした。戦後も活躍した村野藤吾や丹下健三はもちろん、藤井康二もその一人でした。家を引き取るといっても、窓や階段、床などの化粧部分を利用して、なるべく建設当時の姿を意識して新たな住宅をつくりました(写真4-6)。家をつくっている間は、西洋へも学びの旅に行った藤井康二に思いを馳せていました。かつてブルーノ・タウトが桂離宮に感激してドイツの近代建築に影響を与えたように、当時の日本人の建築家が西洋で見た世界を吸収して日本の近代建築の文化を築いていったことを感じる事ができたひと時でした。

フランスで新しい建物が次々に建てられていく黄金の日本に憧れた青年が、日本で古い建物を残すことについて考える中年になったことをあの頃の自分に話したら一体どんな顔をするのだろうか。

写真1 旧歌舞伎座(村野藤吾) 2008年撮影  
写真2 東大阪市旭町庁舎(坂倉準三) 2012年撮影  
写真3 汐見邸(解体前) 2016年撮影  
写真4-6 汐見邸(新築) 2017年撮影  
※撮影はいずれも著者によるもの



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6